# 授受文、受身文、移動文における視点の習得
## ――談話構築を通して――

謝　文儀
名古屋大学国際言語文化研究科大学院生
lily1152@gmail.com

### 1．はじめに

本研究における「授受文」、「受身文」、「移動文」とは、次の例（1）、（2）、（3）が示すようにそれぞれ授受助動詞「～てあげる/～てくれる/～てもらう」、受身動詞「－areru/－rareru」、「行く/来る/～ていく/～てくる」による構文を指す。

（1）　太郎は花子にプレゼントを（買ってあげた/買ってくれた/買ってもらった）

（2）　太郎は次郎に殴られた。

（3）　太郎は花子の家を訪ねてきた。

視点は庵（2000）に従い、物事を表現する際の話し手の立場と定義する。

本研究は授受文、受身文、移動文における視点の習得について日本語母語話者、中国語母語話者と上級中国人日本語学習者の談話構築を通して考察したものである。

### 2．研究課題

課題一　談話を構築する際に異なるグループにおいて授受文、受身文、移動文はどのように使用されているか。それは談話における視点とどのように関連しているか。

課題二　母語また学習環境は授受文、受身文、移動文における視点の習得に影響を与えるか。

### 3．　調査の概要

#### 3.1　被験者

被験者は日本語母語話者 30 名（JNS）、中国語母語話者 30 名（CNS）、上級中国人 CJSL[1]30 名と上級中国人 CJFL[2]30 名である。日本語学習者を上級学習者[3]に限定するのは、談話を産出するには比較的高いレベルの日本語能力を身に付けていなければならないと考えるからである。

#### 3.2　調査方法

五コマからなる漫画[4]を被験者に見せ、その内容を作文[5]で記述させるストーリー構築法

#### 3.3　分析方法

授受文、受身文、移動文の使用に関しては、主節或いは従属節における一回の使用を 1 点とし、

産出をすべて（正用と誤用）集計する。

視点は文、談話に分けて判断してグループ間で比較する。文における視点は、主節で用いられ、アスペクト（テイル）、モダリティー（ノダ、ヨウダなど）の伴わない授受文、受身文、「来る/てくる」および「向かっていく」、「去っていく」のような本動詞自体が方向性を持つ「ていく」移動文を手掛かりにして判断する（久野 1978、森田 1968、1995）[6]。

談話における視点は、談話を通して登場人物のうち一人に固定した場合は統一視点、複数の登場人物に置いた場合は移動視点、手掛かりの表現が産出されていない場合は中立視点とする。

なお、視点を判断する際に日本語学習者の産出は正しい構文[7]のみで行う。また、中国語の視点を判断する手掛かりについては現在研究中のため、本稿では日本語のみについて検討する。

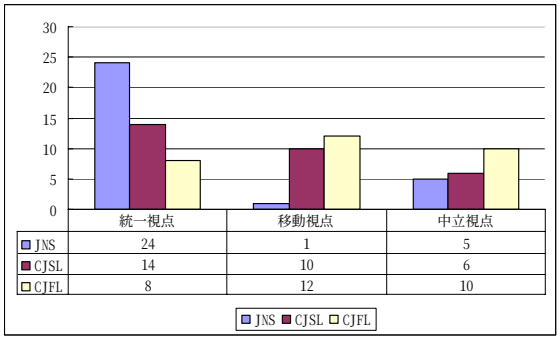
### 3.4　結果と考察

グループ別に産出された授受文、受身文、移動文の集計は表 1（＋：正用、－：誤用、従：従属節における産出）、各グループが構築した談話における視点は図 1 の示す通りである。

表 1　グループ別授受文、受身文、移動文の産出

| 被験者 | 授受文 | | | 受身文 | 移動文 |
|---|---|---|---|---|---|
| | てあげる | てくれる | てもらう | | |
| JNS | 0 | 0 | 従 9 | 従 4 | 34 |
| CNS | 17 | | | 12 | 49 |
| CJSL | 11 | 2 | 従 2 | 15（＋11、－4）、従 2 | 35 |
| CJFL | 13（＋12、－1） | 5 | 従 3（＋2、－1） | 10（＋5、－5） | 14（＋11、-3） |

図 1　各グループが構築した談話における視点の比較




【結果 1】

授受文、受身文は日本語母語話者より日本語学習者のほうが多く産出しており、移動文はほかのグループより CJFL からの産出が顕著に少なく、CJFL にとって移動文を使用するのが困難であることが窺える。

先行研究（田代 1995、渡辺 1996）では、日本語母語話者が日本語学習者より多く授受文と受身文を用いると報告しているが、それは物語の主人公についての描写であった。一方、本研究における産出は例 4、6 で代表されるように物語の主人公（女性救助員）でない脇役（溺れた男の人）についての描写であった。なお、例 5、7 で見られるように同じ出来事について描写するには日本語母語話者は授受文、受身文を使用していない。

（4）　溺れた男が女性監視員に岸辺まで運ばれた。（CJSL29）

(5)　その女性は溺れていた男性を海から救い出し、浜辺へ連れていった。（JNS13）

(6)　男の人はすでに気を失ったため、彼女は人工呼吸をしてあげた。（CJFL22）

(7)　監視員の女性はその男を救助して人工呼吸をしました。（JNS11）

【結果 1 についての考察】

・ JNS はランダムに授受文、受身文を多用するのではなく、主人公を中心にして物語を語るという談話構築の一環として授受文、受身文を使用していると考えられる。

・ 主人公か脇役かに関わらず恩恵或いは受動の場面さえであれば授受文または受身文を用いることが中国語を母語とするグループ（CNS、CJSL、CJFL）に見られ、日本語を母語とするグループに見られなかったことから、中国人日本語学習者（CJSL と CJFL）による授受文、受身文の過剰使用は母語からの転移ではないかと思われる。

・ 移動文は JNS、CNS ともに産出が多いことから考えると、CJFL より CJSL が多く産出できたのは、目標言語に関するインプットの量がその習得を促進したのではないか（Krashen, and Terrell. 1983）と思われる。

【結果 2】

談話を構築する際に日本語母語話者は視点を統一させる傾向を示している。一方、日本語学習者の構築した談話には複数の視点（移動視点）が見られる。

【結果 2 についての考察】

学習者による日本語談話に視点の移動が起きたのは学習者が第二言語における特定の構文の形式と機能のマッピング（form-function mapping）（Givon 1983）が十分にできていないためではないか。つまり、本研究の結果から見ると視点の移動は、学習者が授受文、受身文における視点の用法を習得できておらず、授受、受動の場面さえであれば授受文、受身文を過剰使用することに起因するのではないかと思われる。

## 4．まとめ

課題一　談話を構築する際に、授受文、受身文は中国語を母語とするグループではある事実（授受、受動）を表す手段として、日本語を母語とするグループでは話し手の立場（視点）を表す手段として使用される傾向がある。移動文は母語の異なるグループでは類似した使用傾向が見られるが、日本語の移動文の習得は CJFL にとって困難なようである。

課題二　母語および学習環境は、授受文、受身文、移動文における視点の習得に影響を与えていることが窺えたが、さらなる検証が必要である。

今後の課題として次のことを考えている。

・ 統計分析をかけ、本研究で質的分析によって得られた結果を検証、一般化すること

・　中国語の表現における視点を判断する手掛かりになりうる構文形式を認定すること

・　視点の習得に影響する要因（母語の転移、学習環境、日本語能力、教授の効果など）についてさらなる考察をすること

**参考文献**


Krashen,S. and Terrell,T.（1983）*The Natural Approach:Language Acquisition in the Classroom.* Oxford:Pergamon

Givon,Talmy.(ed) 1983.*Topic continuity in discourse:Quantitative cross-language studies.* Amsterdam:John Benjamins

久野暲（1978）　『談話の文法』　大修館書店

田代ひとみ（1995）　「中・上級日本語学習者の文章表現の問題点―不自然さ・分かりにくさの原因をさぐる―」　『日本語教育』85 号　日本語教育学会

渡邊亜子（1996）　『中・上級日本語学習者の談話展開』　くろしお出版

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2000）　『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』　スリーエーネットワーク

森田良行（1968）　「『行く・来る』の用法」　『国語学』75 号　国語学会

（1995）　『日本語の視点―ことばを創る日本人の発想―』　創拓社


---

[1] JSL（Japanese as a Second Language）とは日本に住んで生活の手段として日本語を習う学習者のことである。

[2] JFL（Japanese as a Foreign Language）とは海外で外国語科目として日本語を習う学習者のことである。

[3] 本研究では、国際交流基金が主催する日本語能力試験（1 級）に合格した学習者を上級学習者だと判断している。

[4]漫画は海辺で女性監視員が溺れた男の人を人工呼吸で助けたが、それを見た他の男たちが溺れたふりをし、女性監視員に救助を求めようとしたことが描かれている。

[5] 作文は分析に十分な量の言語データが得られるため文字数について最低 200 字と制限しているが、被験者に心理的負担を掛けないように作文時間について制限していない。

[6]「来る/てくる」の視点は常に到着点側寄りであって、「行く/ていく」の視点は起点側或いは中立である可能性がある（久野 1978）。森田（1968）は空間的表現の「ていく」「てくる」は、一）移動動詞本来の意味をもち、先行動詞に話し手側への接近と離反との意を添えるという意味、二）話し手側へ移動するのか話し手側から移動するのかという意味があるとしている。森田によると「上がる、降りる」のようなそれ自体方向概念を持つ動詞に付加する「ていく」は二）の意味を表していると考えられる。つまり、「上がっていく」「降りていく」のような複合動詞の視点は常に話し手側（動きの主体側）寄りであると思われる。

[7] 構文の正誤判断に関しては、授受文は与え手と受け手、受身文は動作主と受動者、移動文は起点と目的地の位置づけと視点の置き方、及び両者をマークする格助詞、接続、活用が正しければ正用とする。